

1. 略歴

1983年3月	東京大学文学部国文学専修課程卒業
1983年4月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程入学
1986年3月	同 修了
1986年4月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程博士課程進学
1990年3月	同 単位取得退学
1990年4月	帝塚山学院大学文学部専任講師
1994年4月	帝塚山学院大学文学部助教授
1995年4月	東京女子大学文理学部助教授
2003年4月	東京女子大学文理学部教授
2007年12月	東京大学大学院人文科学研究科 国語国文学専門課程 博士（文学）学位取得
2009年4月	東京女子大学現代教養学部教授（改組による学部名変更）
2013年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本上代文学・和歌文学

b 研究課題

上代（奈良時代以前）日本文学を、韻文中心に研究している。特に『万葉集』の歌人、柿本人麻呂や、大伴家持の作品について、その読み直しを課題としている。『万葉集』の和歌は、中国の先進文明に正面から向き合って成立した日本という国家における草創期の文芸であり、漢詩文の表現に対して、学びつつ対抗するという両義的な関係を結んでいる。それゆえ、当時伝来していた六朝・初唐の漢詩文との比較・対照を主たる研究方法として、和歌独自の表現を明らかにしつつ、その価値を見出すことを論文執筆の際の、目標としている。更に『万葉集』は、7世紀前半から、8世紀中ごろまでの和歌の歴史を語る書物であると考えられ、歌人たちの積み重ねた作品群がいかなる軌跡を描くか、すなわち『万葉集』の和歌史を明らかにすることを、研究全体の目標とする。

c 概要と自己評価

この一、二年の業績は、大伴家持の作品、特に『万葉集』巻十七以降の「歌日誌」の歌において、古代政治史上の事象がいかに関連しているかを明らかにすることに集中している。従来見落とされてきた視点であり、近代における『万葉集』像を反省する材料であろうかと考える。今後は、『万葉集』全体の中で、家持作品を系譜学的に位置づける作業を進めたいと目撃している。

d 主要業績

(1) 論文

- 「安積皇子挽歌論—家持作歌の政治性—」『萬葉』219、2015年4月
- 「大伴家持「予作歌」の性格と位置」『芸文研究』109—1、2015年12月
- 「諸兄と家持—巻二十を中心に—」『萬葉』222、2016年5月

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

- 東京女子大学非常勤講師 2013、4～現在
- 御茶ノ水女子大学非常勤講師 2014年4～9月、2015年4～9月
- 慶應義塾大学非常勤講師 2016年4月～現在

(2) 学会

- 萬葉学会 編集委員
- 上代文学会 常任理事

(3) 学外組織

- 日本古典文学学術賞選考委員会委員
- 大学改革支援・学位授与機構 国語・国文学部会専門委員